お茶と観光

観光における茶文化の商品化

和歌山大学国際観光学研究センター　カウクルアムアン　アムナー
翻訳／和歌山大学観光学部　竹鼻　圭子

7章　茶とヘルスツーリズム―スリランカのヒル・カントリーのケース

1　序論

第1章で述べたように、茶文化の商品化には異なる形態のサステナブル・ツーリズムが関係しており、グリーン・ツーリズム、コミュニティー・ベースド・ツーリズム（CBT）、ヘルスツーリズム、及びヘリテージ・ツーリズムで構成される概念の枠組みを提案した。

本章では、茶製品への関心を高める手段として、その中のヘリテージ・ツーリズムを紹介する。スリランカの茶栽培地域のケースは、ヘリテージ・ツーリズムには茶の消費の需要と供給を刺激する特徴がある一方で、地域のジェントリフィケーション（再生高度化）の脅威に曝されていることを示している。とは言え、ヘリテージ・ツーリズムは、茶生産の持続する上での戦略を提供するだけでなく、茶のコミュニティーの景観遺産や地域特有の生活を喧伝するアイデアをもたらすのである。

2　ジェントリフィケーションとヘリテージ・ツーリズム

ここでは、茶栽培地域に居住あるいは滞在する都市の住民や観光客に対して、観光がどう関与してきたかについて注目したい。これは、地域のジェントリフィケーションの過程をたどることであり、これまで労働者階級の地域であったところが、より裕福で中流、あるいは上流階級のライフスタイルに属する新しい住民に置き換わる過程である。ジェントリフィケーションは波及力の異なる四段階で起こるとされ、微弱なジェントリフィケーション、初期のジェントリフィケーション、真のジェントリフィケーション、そして発展段階のジェントリフィケーションの各段階がある。初期のジェントリフィケーションの段階では、茶のコミュニティーは歴史的あるいは文化的保護や保存の形の恩恵を受けることがあり、例えば農家が共同で所有していた茶生産工場の、コミュニティーの茶博物館への移管などである。しかし、このような恩恵も、都市住民や観光客の流入によって、地域の本来の住民との入れ替わりがおこるジェントリフィケーションの発展段階では、重なる負の影響によって陰りを見せる。この段階は、地域の人々の伝統や文化の存続を目指す茶のコミュニティーの持続性に顕著な脅威となり、移住者の圧力によって、本来の住人の生活費の高騰、土地使用の変化、地価の変動、そして家計や貯蓄方法の転換が迫られるのである。観光に関しては、ジェントリフィケーションは観光客市場の需要に伴う商品やサービスの消費動向に合わせて、居住空間を再構築することに焦点が置かれる。したがって、観光客自身が、セルフ・ジェントリフィケーションやヘリテージ・ツーリズムといった概念によって、伝統的な建築環境を維持していく再生高度化の当事者となるのである。ヘリテージ・ツーリズムでは、遺産としての価値への関心から観光地を訪れ、体験を通じて芸術的な意義や関連性を明らかにすることを目指しており、観光地の歴史的に一貫性のある意味付けや、教育資源としての真価厳密性が問われるのである。茶栽培地域のヘリテージ・ツーリズムには、村落やティーハウス、茶生産工場、あるいは茶園や農法、調理法を伝える遺構などの文化景観などが含まれる。

このような遺産は、当初から観光客を誘引する目的を持っていたわけではない。観光振興が図られ、外部から人々が流入し、観光客や投資家も流入する中で、伝統的な茶のコミュニティーや生活の在り方も変化する。例えば、投資家は茶農園の伝統的な建物に代えて、巨大なリゾート施設を建てるだろうし、マスツーリズムによって茶農家のプライバシーが侵されるだろう。ヘリテージ・ツーリズムはサステナブル・ツーリズムの範疇であり、ニッチ市場を対象としているので、このような問題や対立を防ぐだろう。これが「セルフ・ジェントリフィケーション」といわれ、長期滞在の観光客や移住者などといったジェントリフィケーションの担い手が、コミュニティーの地元民になり、帰属性の意義を変化させているのである。例えば、茶農家の機能を変えることで、新しく移住してきた住民が、茶レストランや茶体験センターとして運用しており、スリランカのヒル・カントリーのケースがよく取り上げられる。

3　スリランカのヒル・カントリーにおける茶文化の商品化

スリランカは世界第4位の茶生産国で、「セイロンティー」として知られる。コーヒー栽培がカビによるコーヒーさび病で壊滅した一九世紀の末以来、茶はスリランカの歴史と経済に深く関係して来た。1867年にスコットラン

ド人のジェイムズ・テイラーがスリランカに茶を導入し、最初のスリランカ茶は同年にキャンディーの南東にあるルーラコンデラで栽培された。スリランカでは紅茶が主に生産されていて、3つの海抜の異なるゾーンで栽培されている。高地の地域はバドゥーラとヌワラ・エリヤにあり、海抜1200メートルを超えていて、もっとも優れた茶が生産される。海抜600メートルから1200メートルの間で育つ茶は、価格も品質も中程度であり、キャンディーが中心生産地である。海抜600メートル以下の地域の茶はカフェイン濃度が高く、海岸線から内陸に入ったふもとの丘陵地帯が生産の中心であり、ガルやラトゥナプラが拠点となっている。

　フランスの有名なワイン生産地域と同様に、スリランカの茶生産地域は7つの地域に分けられていて、それぞれ特色ある茶で知られており、図1にあるように、ヌワラ・エリヤ、ユーダ・プサラワ、ディンブラ、ウバ、キャンディー、サバラガムワ、ルフナである。南部低地にあるルフナを除いて、他の6箇所の茶農園はイギリス植民地時代の豊かな遺産の「ヒル・カントリー」として知られる等高線上の段地にある。ヒル・カントリーはスリランカの茶観光の主な資源となっていて、多様な気候、地理、社会文化、あるいは様々な環境要素に起因する。この地域は休暇を利用した観光客が多数訪れる有名な観光地であり、彼らは茶の遺産や自然の滝に恵まれた茶園の景観の中で、余暇をくつろいで過ごす。

　植民地時代以来の伝統で、茶葉はタミル人の女性によって、7日から14日に一度手摘みされ、日々の一人当たりの目標は20キログラムから30キログラムであり、摘まれた茶葉は茶畑に点在する古い茶工場に運ばれる。この伝統的な茶摘みは茶遺産の魅力的な要素の一つであり、ヒル・カントリーを訪れる観光客を魅了していて、セイロンティーの文化として商品化された茶関連の遺産体験観光を経験できる。

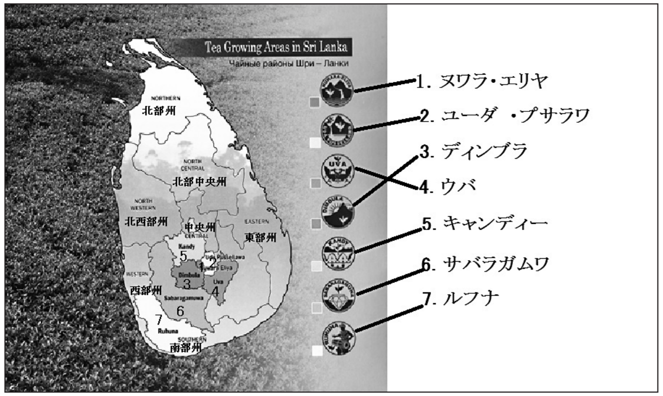

図1　スリランカの茶栽培の7つの地域　http://www.sebastea.com/interesting/1

　茶文化の商品化には4要素があり、茶の空間、茶のコミュニティー、茶の物産とサービス、そして茶関連の体験である。スリランカのヒル・カントリーの茶園では、これら4要素がどのように商品化されているのかを、茶に関連したヘリテージ・ツーリズム、中でも茶園の建物のジェントリフィケーションとして見ることができ、また茶に関連した観光体験は茶の景観、茶に関連した建築物、あるいは茶摘みや茶の製造、販売、消費を利用している。

　茶の空間に関しては、茶製造会社が茶の景観遺産を利用しており、茶の宿泊施設や茶観光体験のセンターの特徴となっている。ヒル・カントリーの茶栽培コミュニティーに位置する宿泊施設は5種類の範疇に分けられ、ヘリテージ・ホテル、茶農園主バンガロー、ブティック・ホテル、別荘、エコロッジがある。

●ヘリテージ・ホテルは植民地時代の茶農園主のクラブハウスを再生高度化したものである。クラブにはバーや食堂やスポーツ施設があり、宿泊施設のあるものもある。例えば、バンダラヴェラのフォーマー・プランターズ・クラブは1893年に建てられ、現在バンダラヴェラ・ホテルとして営業している。

●茶農園主バンガローは茶農園地域に散在するが、以前は茶農園の建物であったものを宿泊施設に改装している。ベランダのあるバンガローは2種類の文化の建築物があり、ブリティッシュ様式のものと、インドの王宮様式のもので、高価だが海外からの観光客に人気の宿泊施設である。茶農園主バンガローの中には地域の住民が運営していなくても、「ティー・トレイル」を組織して、茶栽培のコミュニティーを喧伝し、茶のユニークな生活の実体験を宿泊客に提供している。

●ブティック・ホテルは茶をテーマとした宿泊施設として建築された小さな宿である。新しい建物ではあるが、遺産茶園の雰囲

図2　茶農園主バンガローでティー・トレイル体験の喧伝　www.enchantingtravels.com

気と素晴らしい眺望をうまく利用している。

●別荘は大きく豪華な建物で、必ずしも茶園にあるわけではないが、遺産としての茶の空間と茶のコミュニティーの環境をうまく利用している。例えば、バンダラヴェラのダッチ・ハウスはスリランカのオランダ風建築物のデザインを利用して建てられている。

●エコロッジは田舎風の茶関連宿泊施設で、茶栽培地域独特の自然環境と接することができる。

宿泊施設以外にも、多くの茶園が茶センターとして茶製品の消費需要を刺激するための様々な体験を提供している。茶センターでは、茶生産現場で茶のティスティングや茶工場見学などの体験を提供することで、小売りベースでの販売を目指している。例えば、1921年設立のプサワラのブルーフィールドティーセンターでは、スタッフとしてガイドを配置しており、生産過程を説明でき、かつて使われていた建物や機械などといった場所や機材の意味を解説できる。茶の小売店に行く前に、観光客は会社のスタッフのツアーガイド付きの生産工場見学に招待されるということである（図3）。また、茶を提供するためのレストラン施設を持つ工場もあり、茶を自分で作ることができて、来訪者は満足する。ヌワラ・エリヤのラブケリーティーセンターは工場の敷地に茶レストランを置き、茶畑と谷の小川の素晴らしい眺めを楽しめる（図４）。この会社は工場ツアーも実施しており、茶のティスティングのための観察室もある。

図3　ブルーフィールドティーセンターのスタッフ。
昔の工場での生産の解説をして、観光客を製品の購入に導く。

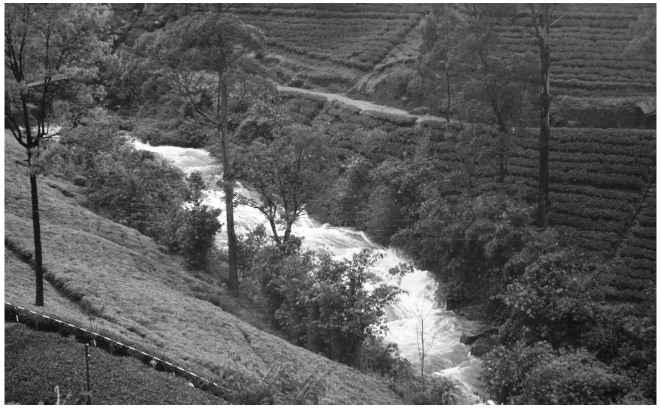
図4　遺産の茶畑の景観と川の流れ。ヌワラ・エリヤのラブケリーティーセンター。

４　結論

スリランカの茶産業が衰退する中、茶農園遺産地域の観光は経済成長のための代替え手段になりうる。サステナブル・ツーリズムの発展した形態としてのヘリテージ・ツーリズムは、観光客の興味を刺激し、茶製品の消費を喚起し、茶のコミュニティーのゆったりとした環境でくつろぎ、地域への帰属性を感じて、セルフ・ジェントリフィケーションに至る。茶遺産の宿泊施設やサービスが広まっていて、遺産建築物を転用したものや、茶農園の昔ながらの景観を利用して新築されたものである。このようなジェントリフィケーションを超えて、その地の遺産としての価値を理解することが、伝統的な茶栽培地域の保護の促進には何よりも重要である。

（カウクルアムアン　アムナー）
（翻訳者：たけはな　けいこ）